

建学の精神について —多様性における不動点—

村 田 康 常
市 原 信太郎

1 はじめに

本学は、聖書の言葉を建学の精神としている。「愛をもって仕えよ」という言葉は、私たちの学院生活の上に掲げられ、110年の歴史の礎となった理念である。しかし、この言葉を本学における生活と実践の頭上はるか彼方にある言葉として、あるいは現在の日々の生活とは隔絶した歴史の彼方の過去の言葉として理解しているだけでは、この言葉は生きた建学の精神とならないだろう。精神・理念・言葉は、額に入れて飾っておくだけでは何の意味もない。この言葉は、学院生活を含む私たちの日常生活の礎として、日々の現実のなかで常に聴き取られ問い直され、実現しようと試みられ続けてこそ、建学の精神として生きた言葉となる。そのような意味で、建学とは、過去の出来事ではなく、今、このときまで継承され実現されつつある働きである。建学の精神としての聖書の言葉を聴き取り応答することは、言葉に生きた意味を与えるだけでなく、私たちの日常の学院生活そのものに意味の中心を与えることである。

私たちはここで学院における生活、学院生活という言葉を用いるが、そこには、教育と保育を中心にした多様な生活と実践があり、多様な立場に立ち、多様な感性や価値観をもって営まれる生活がある。現に、柳城学院には、教員生活、職員生活があり、学生生活があり、保育者生活と子どもたちの生活がある。建学の精神とは、その多様な生活がそれぞれの価値を実現しつつ共同の生活となり、多様な出来事がそれぞれの意味をもちながら一つの歴史となる交わりの中心として聴き取られ応答される言葉である。その言葉は、多様性を排除する画一主義的な価値基準やイデオロギーではなく、また多様な生活を個々ばらばらに並立させ孤立させたままで頭上に掲げられた理念でもない。私たちはここで、本学の建学の精神と、110年

にわたって営まれ続けて今日に至る柳城学院における生活や実践との結びつきについて考察を試みたいのだが、まず、その結びつきが多様であり、多様な生活が営まれていることを率直に認めなければならない。その多様な学院生活のすべてを知ることとはできないこと、また、そのなかの一人の生活ですら知り尽くすことはできないことをも、率直に認めなければならない。そして、学院生活は、柳城学院に関わる一人ひとりの生活のすべてではなく、それぞれの生活のなかで固有の位置と意味をもっていることを認めなければならない。

本小論において私たちは、学院生活の意味の中心としての建学の精神を、「ゆらぎや多様性における不動点」として理解することを試みたいと思う。多様な学院生活が、その多様性を十全に実現しながら一つの共同の生活となる建学の継続的な営みのうちに、不動点としての建学の精神を見出すということが、この小論の基本的な立場である。

2 聖書の使信としての建学の精神

本論に入る前に、建学の精神の文言の出典である新約聖書「ガラテヤの信徒への手紙」5章13節について、やや広い範囲から概観しておこう¹。

「By Love Serve」が本学のモットーとして用いられるようになった起源は未だつまびらかでないが、かなり初期の時代より用いられていたことは確かである²。当時、英語の聖書といえば King James Version (KJV) であり、英文はこの聖書の「by love serve one another」からとられている。日本文「愛をもって仕えよ」は、いわゆる「文語訳聖書」(大正訳)の「愛をもて互に事へよ」の「互に」の部分削除し、英文に合わせたものである³。ギリシャ語原文は「διὰ τῆς ἀγάπης δουλεύετε ἀλλήλοις」であり、直訳すれば「愛

によって互いに奴隷となれ」である。

この書簡の著者がパウロであることはほぼ疑いのないところであるとされるが、「ガラテヤ」が指す場所についてはいくつかの説がある。ただ、いずれにせよ、パウロがこの書簡を書き送った「ガラテヤ」の共同体の状況については、本書簡の内容そのものからかなりを推測することができる。

パウロは、この共同体を以前に訪問し、滞在したことがある。その際にガラテヤの人々はパウロを「キリスト・イエスでもあるかのように」受け入れ、様々な犠牲を払っても彼の必要を満たそうとした。そしてパウロを通してキリストの福音を受け入れた（４：１３－１４）。その際に、パウロは決してユダヤ教の律法を押しつけようとはせず、それに従うことは要求していなかった。

ところが、パウロがこの地を離れた後に、彼に敵対する者たちがこの地域に入り込み、扇動工作を行って、人々のパウロへの信頼をはぎ取った後、いくつかの重要な点で彼の教えを修正しようと試みた。それらを列挙すれば以下のようなもの。

1. 扇動者たちは、まずパウロの使徒としての真正性に疑問を投げかけた。パウロは生前のイエス・キリストに直接会っておらず、従ってエルサレムの使徒たちよりも価値が低い者だと主張したのである。
2. 従って、パウロの教えたことは完全ではなく、真の使徒の教えによって補完される必要があった。
3. 具体的には、ユダヤ教の教えとしての律法に従うことの重要性、ことに割礼を受けることの重要性を強調した。

パウロはこれらに対し、以下のように反論している。

1. パウロはイエス・キリストの啓示によって福音を知ったものであり、自身の使徒性も福音も人からのものではない（１：１１－１２）。エルサレムの使徒たちも、彼を自分たちと同格の使徒と見なしている（２：９）。
2. エルサレムの使徒たちも、彼の福音に何の付け加えも求めず、かえって彼自身の固有の召命を認めている（２：２、６－８）。
3. エルサレムの指導者たち自身も、度重なる扇

動者の試みにも関わらず割礼を重要視していない（２：３－５）。

しかし、この書簡は単なる反対者への反駁のみを意図していない。量的にいても、書簡の中心的部分は３章１節から４章１０節にわたる、パウロの福音理解と、その福音に従うものとしてのふさわしい生き方（建学の精神の文言はこの部分に含まれる）についての彼の論述である。

パウロは、彼がガラテヤの共同体を訪問した際の人々の愛に満ちた、犠牲をもいとわない迎え入れに強い感謝の念を表明している（４：１４－１５）。そして、この愛に満ちた共同体が、キリストの福音に出会った共同体として、「愛の実践を伴う信仰」（５：６）を生きていることを喜んでいて、ところが、先に述べた扇動者たちの工作によって、この共同体は愛の実践よりも律法という一つの形式に従うことを重要視する方向へと変質していきようとしていた。この扇動者たちに対するパウロの激しい怒り（１：８－９）は、この変質が彼にとって許容できない、福音の本質のねじ曲げを伴うものであったことによる。

パウロにとって、キリストの福音とは人を自由にするものに他ならない。律法によりがんじがらめになっていた以前の自分が、キリストとの出会いによって解放され、キリストにある自由を生きるものとされたように、ガラテヤの人々にもこの自由を享受してもらいたいという強い願いをもっていた。そして、彼らはパウロにとって理想的な姿で、この福音の自由を生きる姿を示していたのである。彼にとって、割礼を受けるかどうかという問題は、この自由をどのように受け取るかという本質と関連しており、単なる形式の問題として見過ごすことはできなかったのである。

パウロの主張するところによれば、律法に規定されていることは、救いの歴史の中で一定の役割をもっていたが（３：２１以下）、キリストによる信仰の啓示によってすでに置き換えられているものである。律法は、人がどんなに努力しても完全に実行することが決してできないものであり、それを守ろうとすればするほど自身の罪深さの認識を強めることになる。人間はイエス・キリストへの信仰によって、この罪深さから贖い出され、キリストに結ばれた神の子として、アブラハムに予

告された「あなたのゆえに異邦人は皆祝福される」という約束を受け継ぐものとなるのである。そして、キリストは人間に自由を得させるために人々を律法から解放し、自由の身にしてくださったのであるから、奴隷の軛に再度つなげることがあってはならない (5:1)。

しかし、律法から解放されるということは、無秩序な放縦に身を任せることではない。パウロは、このようにして得させられた自由とは、愛をもって互いに仕え合うための自由であると言う (5:13)。そして、「隣人を自分のように愛する」ことを通して、本来であれば人間を罪深さの牢獄に閉じこめる律法というものを全うすることができるのである (5:14)。

このようにガラテヤ書を見る時、そこには我々が建学の精神を解釈する上で重要なながしが見いだされる。すなわち、かつてパウロに対し「自分の目をえぐり出してもわたしに与えようとした」(4:15) ほどに愛の業の実践に豊かであったガラテヤの人々が、パウロに対しては生前のキリストに直接会ったかどうかという事実、自分たちに対しては割礼の有無という事実を物差しとし、パウロや自分たち、そして共同体の成員を測り始めた今、共同体の性格は深いところで変質してしまうというパウロの強い危機感と警告である。

愛による絆が、ひとたび律法という物差しで置き換えられてしまったならば、その物差しで互いを測り合う関係の中に、愛によって仕え合い生かす喜びはもはや見だし得ない。それぞれの賜物に応じて多様に実践されていた愛の業の姿は、割礼の有無という均一化された一点に捨象されていく。このような変質を遂げた共同体にあっては、もはや日々の生活の中で隣人への愛を生きたことの重要性は忘れ去られ、共同体はそれぞれの必要に応じて他から収奪し合う場としてしか認識されなくなる。そのような関係の中では、一人ひとりが固有の尊厳を持つ存在であることなどは考慮されない。相手が自分にとって利用価値があるかどうかということのみが重要となり、利用価値のない他者は自らの存在を不快にするものとして排除すべき対象となる。

このパウロの危機感から我々が汲み取るべきも

のは何であるのか。そして、パウロが涙ながらに訴える愛の共同体の姿とはどのようなものであるのか。以下、いくつかの事例を通して、現代の我々の状況にこれらの問いを投影することを試みたい。

3 学院生活における宗教性

3. 1. 日常生活をていねいに生きる

保育者・介護福祉専門職の養成校においてこのような聖書の言葉を建学の精神とするとどのようなことか。ごく一般的に言えば、本学は、キリスト教の精神に基づいた教育の場だといえるだろう。私たちは、キリスト教と教育、宗教と教育との関係とはどのようなものであり、またどうあるべきかという問題を常に問わなければならない。しかし、ここでは、この問題に直接取り組む前に、日常生活の一つ一つが実現しうる生の意味について考え、多様な日常生活が、多様でありながら共に生きる共同の生活となることについて考えるという迂回路から始めたい。

建学の精神は、「愛をもって仕えよ」という聖書の言葉によって表現されている。愛は、人間を生かす力である。人間が生きているところでは、常に、その人を生かそうとする力が働いている。自分を生かす力が働くように、隣人を生かす。もし愛をそう理解すれば、それは、共に生き、互いに生かしあう生活、つまり共生のことになるだろう。

愛とは、共生のことなのか。人と人とが共に生きているところに、愛があるのか。

極端な例になるが、人と人とが共に生きることについて、ある極限的な状況を見てみよう。第二次世界大戦後、シベリアに抑留され強制収容所に収監された旧日本軍のある抑留者は、過酷な労働と激しい飢えのなかで生じた「ある〈共生〉の経験」について語っている。収容所での「共生」は、乏しい食事を「食缶組」と呼ばれる二人一組の収容者のペアが分け合い、一組の毛布で一緒に厳寒の夜を眠り、強制労働も二人で担当して疲労を少しでも軽減するという状況下で生まれた。彼らは、乏しい物資と過酷な労働のなかで生き残るために、まず「食缶組」の相手と争い、やがて相手の存在を耐えねばならないという認識に辿り着

く。彼らのあいだに敵対が消えたのではない。「ここでは、人間はすべて自分の生命に対する直接の脅威として立ちあらわれる。しかもこの不信感こそが、人間を共存させる強い紐帯であることを、私たちはじつに長い期間を経てまなびとったのである。」⁴ 人間存在の徹底した孤独がむき出しになったとき、他者の生存が絶えず自己を脅かすのではないかという不信感から、強制収容所での「共生」が生じた。このエッセイの著者は、カール・バルトの『ロマ書』に出合って衝撃を受け、1938年にバルトの弟子だったドイツ人宣教師から洗礼を受けたのち戦地に赴いて戦後にシベリアに抑留された詩人、石原吉郎である。

石原の語る「共生」は、ナチスの強制収容所の過酷を窮めた体験を通じて、それでも生きる意味を確信し続けたフランクルの「それでも人生にイエスと言う」⁵という希望の言葉とほぼ同じ状況から生まれながら、フランクルの肯定（Ja-sagen）とは鋭く対立する「不信感」のなかで生じた自己生存のための必要である。

「共生」という言葉は、このような限界状況のなかでの経験からも出てくる。しかし、私たちは、帰国した石原が、この経験を踏まえて何を語りだすのかに注目したい。

石原は、同志社大学での講演の席上、学生からの質問に答えて、「日常生活をていねいに生きよ」と答えたと言われている⁶。この言葉は、精神科医として実存分析という立場を打ち出したフランクルの「人生の問いのコペルニクス的転回」に通じる。フランクルは、「人生に私は何を期待できるのか」と絶望する人に向けて、その問いの向きをひっくり返しなさいと言う。あなたが人生に問うのではなく、人生があなたに問うている。「人生があなたに何を期待しているのか」を聴き取り、自分がそのつど瞬間瞬間に人生から問われていることに応えなさい、とフランクルは言う⁷。

日々をていねいに生きること、人生に向かってその意味は何かを問うのではなく、人生が今の瞬間に自分に期待し問いかけていることに応える責任応答が、それぞれの過酷な収容所体験を経て、石原とフランクルが見出したことだった。二人は、この人生を生きるの自分しかいないこと、誰もそれを代わることはできないこと、そしてま

た、他者の人生を生きるのもその人しかいないということ、つまり人間存在の徹底的な孤独と代替不可能な個別性に焦点を当てながらも、それでも、それぞれの言葉で、このかけがえのない、誰も代わることのできない自分自身の生を、日々刻々、ていねいに生き、その瞬間に成就されるべき生からの期待に応答することを訴えている。

今、こうした限界状況を生きた人たちの辿り着いた言葉を取り上げたのは、彼らの、日常生活をていねいに生き、一日一日、一瞬一瞬に、人生が私たちに問いかけ期待していることを聴き取り応答しなさいという言葉が、この現代社会においても、改めて、強い意味をもっていると思われるからである。「共生」という言葉がしばしば語られる現代社会で、私たちは、一度、この言葉に込められている期待とは逆の、不信感と絶望の限界状況に身をおいた人たちから発せられた、日々をていねいに生きよという言葉に立ち返るべきだろう。たとえば、私たちは、柳城学院に関わる者として、日々の学院生活をていねいに生きているか。

日常生活は、理念的な倫理学体系や道德律の精巧な調和と秩序に対して、無秩序と偶発的事件に満ちている。ボンヘッファーは、西欧の倫理学がその全歴史を通じて究明してきた普遍的な倫理学体系や道德律といった偉大な「上層建築」から見れば、「日常的なるものの領域」は「不調和な混乱に満ちた下層建築」であると言う。「そこには、本質的な困難が存在しており、そこでは普遍的・基本的な道德律を宣べ伝えることが、それだけでは不十分であり、不適切であり、ふさわしくないことであるということを知るために、人は多くの経験を今までに重ねて来なければならなかったのである。」⁸ 日常生活には、理念的で普遍的な道德律や倫理学体系によっては解決できないような現実の「本質的な困難」がある。

フランクルが言うように、私たちは自分の人生そのものから、一瞬一瞬、今しか実現できないことを期待され、問いかけられている。今、私があなたに伝えなければならないことは、明日には、もう伝えられないかもしれない。今、あなたから聴き取り、応答しようとしなければならないことは、明日には、もう聴かれられないかもしれない。現実の生を生きるとは、今をていねいに生き、人生

が私たちに投げかける問いや期待に対して、日々、責任応答を精一杯果たすことだと彼らは言う。そこには、単なる机上の崇高な道德律や倫理学体系ではなく、限界状況を生きた実践者の生活を貫く単純だが鍛え抜かれた信念がある。理念的な思索やイデオロギーを超えて、人が、日々の生活に、またそこで出会う眼前の他者に、できるかぎり誠実に向き合い、その呼びかけに応答しながら生きようとする謙虚さがある。そして、それこそが「日常的なるものの領域」の「本質的な困難」である。

3. 2. 今を生きる

子どもとの関わりのなかで、日常生活の「本質的な困難」を直視し、今、ここでの日常を生きることの大切さを訴えた人の言葉を聞いてみよう。

ナチス・ドイツ占領下のポーランドで、1942年にみずからの経営する孤児院の192人の子どもと共にトレ布林カ強制収容所で殺された教育者・作家・小児科医・社会事業家のヤヌス・コルチャック(本名ヘンリク・ゴルトシュミット)は、同時代のボンヘッファーに呼応するかのようになり、「骨折りということの話ならば、今日のほうがより困難なものだ」⁹と言っている。コルチャックが、今日という日を生きる「困難」を語るのには、将来の名のもとに今日という日を奪われていた存在、つまり子どもたちを前にしたときである。彼は、子どもが「今」を生きているということを尊重するよう訴えて、次のように述べている。

今という時間を、まさに今日という日を、尊重されよ！もし我々が子どもに、意識的な責任ある現実をもって今日という日を生きさせてやらなければ、いったい、子どもはどのようにして明日を生きることができるのか。¹⁰

国際連合が1989年に採択した「子どもの権利条約」に大きな影響を与えたといわれるコルチャックは、子どもが将来を生きる存在だから価値があると見なす子ども観を批判し、子どもには今、現在をありのままに生きる権利があることを強調して、「教育者は、はるか将来に向かって責任をとることを義務付けられているのではなく、彼は悉く

今日という日に責任を負っている」¹¹と言う。そして、子どもを育て教育する者は、子どもを守られる権利をもつだけの未熟な存在と見なすべきではなく、「我々が子どもを尊重し信頼できるように成長したときに、彼が我々に信頼を寄せ、そして何が彼の権利なのかを語ってくれるだろう」¹²と言う。さらに、彼は教育者に向けて次のように語る。

ありのままの自分でいなさい。そして自分自身の道を探し求めなさい。子どものことを知ろうとする前に、まず、自分自身について知ろうとせよ。子どもの権利と責任について述べようとする前に、自分ができることについて自分自身に答えなさい。〔中略〕自分自身でありなさい。そして子どもたちが自分自身であると思われるときに、子どもたちを熟視するので。よく見るのです。¹³

コルチャックは、子どもを前にして、ありのままの子どもを熟視せよと言い、子どもの生きる今日という日のうちに「困難」があることを理解せよと訴える。そして、今日という日の困難のなかを生きる子どものありのままの今を尊重せよと言う。コルチャックにとって、教育の原点は、子どものありのままを熟視すること、今を生きる子どもの権利を尊重することであり、そのために教育者自身が、ありのままの自分を理解しなければならない。そして、すべての人間が、ありのままの自分を知り、自分が未来でも過去でもなく、まさしく今を生きていることを理解しなければならない。コルチャックは次のように呼びかける。

今、ここ、今日を大切にしよう嘆願します。もし私たちが現在を意識的に、責任をもって生きる生き方をまだ学んでいないとしたら、どうして将来の生を確実なものにすることができるのでしょうか。〔中略〕

今、この一瞬、一瞬を大切にいなさい。なぜなら、今のこの一瞬は過ぎ去り、決して二度と戻って来ないからです。¹⁴

コルチャックは「今、この一瞬、一瞬を大切に

しなさい」と言い、「現在を意識的に、責任をもって生きる生き方」を学ぶようにと呼びかける。最後まで孤児院の子どもたちと共に留まり、強制収容所で殺されたコルチャックの言葉は、強制収容所を生きのびた石原やフランクルの言葉と重なって、現代社会を生きる私たちに強く響いてくる。そのような生き方を希求し、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」¹⁵と言った詩人・教育者が、宮澤賢治である。賢治は、その死の10日前、かつての教え子で当時教員だった柳原昌悦に宛てた書簡で、病身の自分が「今日の時代一般の巨きな病、『慢』に犯されて、『空想をのみ生活して却って完全な現在の生活をば味ふこともせず〔中略〕人を怒り世間を憤り従って師友を失ひ憂悶病を得る』に至ったという自責の念を綴り、次のような言葉を遺している。

あなたは賢いしかういふ過りはなさらないでせうが、しかし何といっても時代が時代ですから、十分にご戒心下さい。風のなかを自由にあらけるとか、はっきりした声で何時間も話ができるとか、じぶんの兄弟のために何円かを手伝えとかいふやうなことはできないものから見れば神の業にも均しいものです。そんなことはもう人間の当然の権利だなどといふやうな考では、本気に観察した世界の実際と余り遠いものです。どうか今のご生活を大切にお護り下さい。上のそらではなしに、しっかり落ちついて、一時の感激や興奮を避け、楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならぬものは苦しんで生きていませう。¹⁶

「本気に観察した世界の実際」のなかで「完全な現在の生活を味わう」こと、そして「今のご生活を大切にお護り下さい」という賢治の願いは、死を目前にして発せられた呼びかけであり、収容所生活の限界状況を経て発せられた石原の「日常生活をていねいに生きよ」という言葉と重なる。「慢」を戒め、日常の生活が「できないものから見れば神の業にも均しいもの」だという賢治の言葉は、「現在を意識的に、責任をもって生きる生き方」を学ぶようにと訴え「今、この一瞬、一瞬を大切にしなさい」と語ったコルチャックの言葉に

も通じる。毎日の日常生活をていねいに意識的に生きよという、コルチャックや石原、賢治の呼びかけは、命令ではなく、問いである。フランクルが言うように、私たちは、日々、問われている。私たちは、日常を「上のそらではなしに」意識的に責任をもって生きることを問われている。

それは、どのような問いなのか。

3. 3. 日常生活と宗教的生活

13年に及ぶ病床生活のなかで一時は自分を「废品同様の人間」¹⁷だと思い死を考えたこともあった三浦綾子は、療養中に洗礼を受け、やがて、堰を切ったように旺盛な著作活動を始めた。その自伝的な随筆のなかで、三浦は、日常の生活をていねいに生きよという言葉が呼びかける事柄を、次のような具体的な問いとして問いかける。

わたしたちの今日の一日を、ここで一人一人顧みていただきたい。今日の一日は、あなたの一生に、あってもなくてもよい一日だったか。どうしても、なくてはならぬすばらしい一日だったか。もしくは全くなかったほうがよかったような一日だったか。

そしてまた考えていただきたい。今日のような毎日が積み重なった一生は、すばらしく有意義なものか。今日のような毎日の積み重ねは、何の意味ももたらさないか。今日のような毎日の続く一生なら、むしろないほうがいいのか、どうか。¹⁸

このような問いを投げかけられたとき、私たちは、肯定的に答えられない自分を見出すかもしれないし、有意義な毎日を生きることなどこの現実の世界では不可能ではないかと反問したくなるかもしれない。しかし、この問いは、まず、そうした自分や現実の世界に気づくことを求めている。今日の日常生活をていねいに大切に生きているかという問いを、石原やフランクル、コルチャック、賢治、三浦といった個人が収容所体験や闘病生活のなかで出した特殊な問いとして、自分の日常生活とはかけはなれた言葉だと受けとめれば、この問いは、私たちの日常生活を問う問いではなくなる。しかし、この問いは、特定の個人が、日常生

活とはかけはなれた限界状況下で発した、特殊な問いではない。彼らは、その苦悩の生のなかで、この問いが、すべての人、とりわけ、今、ここに生きている自分自身に向けて問われていることに気づいた人たちである。私たちもこの問いを問われている。私たちがこの問いを誰かの問いとしてではなく、日常を生きる自分自身の問いとして受け止め、この問いに肯定的に答えられない自分に気づき、自分たち一人ひとりが肯定的な答えを発することのできない現実の世界にいると気づかされたとき、この問いは、他ならない私たち自身の日常生活を日々刻々問い続けている私たち自身の問いとなる。この気づきのなかで、私たちは、毎日の日常生活をていねいに生きることの意味と困難さを自覚する。

日常生活とそれを取りまく現実の世界のうちに、意味あるもの、価値あるものが実現されるのを待っていることに気づき、同時に、それが実現不可能な、あるいは実現の困難なものであることに気づくとき、私たちのうちから、どのように生きればよいのか、という問いが、切実な問いとして出てくる。こうした自覚をともなって出される人生の問いは、日常の生をていねいに生きているかという問いに対して、それは困難だ、不可能だ、という答えをともなって発せられた問い返しである。そのとき、私たちは、何から問われ、何によって気づかされ、何に向けて問い返ししているのか。三浦は端的に、「宗教」と言い、「神」と言っている。

それほど貴重な一日なのに、わたしたちは、来る日も来る日も、漫然と送り迎えているような気がする。

そのわたしたちに、本当の生き方を教えてくれるものが宗教である。世には一生神のことを考えずに生きる人もいる。しかし、何かは知らぬが、人間以上のものを求めつつ生きている人、神を求めつつ、ひたすらに生きて行く人もいる。¹⁹

日々をていねいに生き、そのつどの生活において与えられる問いに応答する、という日常の生き方は、呼びかけと応答、問いと問い返しによって

自覚を深めていく対話的な生活になる。日常生活とはかけはなれた限界状況のなかでこの問いが問われるのではなく、また、日常生活のなかで時おりこの問いが問われるのでもなく、この問いのなかで常に私たちの日常生活が問われている。生活のなかで問いが生じるのではなく、問いのなかで生活が生じる。生活のなかに対話があるのではなく、対話のなか生活がある。日常生活がこの問いのなかであり、この対話のなかにあるということが、宗教的生活のあり方である。ブーバーは「時間のなかに祈りがあるのではなく、祈りのなかに時間がある」²⁰と言っている。それが、日常生活としての宗教的生活である。その対極にある生活を三浦は「漫然」と形容している。賢治は、「上のそらではなしに」生きるよう訴えた。漫然とした日々は、時おり問いが生じては雲散霧消していく日常生活である。通奏低音のように問われ続けている問いが、騒音のなかで時おり響くだけの生活である。宗教的生活とは、日常生活を離れて超地上的な境地に立った生き方ではない。日常生活が、あの問いのなかにあるという生のあり方である。そのとき、日常生活は、今、ここで実現されることを待っているかけがえのない価値の潜在する生の瞬間となり、その価値実現の困難さのなかで自己が生きて働く場となる。「上のそら」で漫然と送り迎えていた日々が、その価値実現を待っている貴重な一日になる。そして、漫然とした日々のなかで平易に過ぎていた日常が、にわかに困難な、実行不可能なものとして迫ってくる。その困難のなかで、今日という日がかけがえのない一日であることに気づき、その価値を実現しようと「神を求めつつ、ひたすらに生きて行く人もいる」。そこに、問いのなかでの日常生活がある。

私たちは、創立110周年を迎えた柳城学院の建学の精神を、この機に再度問い直そうとしているのであるが、それはすなわち、建学の精神によって常に問われている私たち自身を見出すことに他ならないのである。私たちは学院生活も含めた日常の生活のなかで、その日常生活の「今、ここ」をいかに生きているかを問われている。私たちがこの問いを受け、学院生活を含めた日常生活の大切さと困難さに気づき、いかに生きればよいのか、と問い返すとき、そこにくっきりと示されて

いるのが、建学の精神である。

「愛をもって仕えよ。」

三浦の言葉を使えば、宗教は、「本当の生き方を教えてくれるもの」である。しかし、私たちは、それを、「本当の生き方を教えつつ問うもの」と受け止めたい。建学の精神は、柳城学院での生活をいかに生きたらよいのかという私たちの問い返しに回答しつつ、改めてくっきりと私たちに問いかけている。日常の生活を、私たちは、愛をもって仕えながら生きているか。この問いに回答しようとして日常生活の困難を見つめ直すとき、私たちの日常となっている学院生活は、対話的な生活へ、宗教的生活へとようになっていくだろう。

三浦が言うように、日常生活の価値とその実現の困難さを知りつつ、「一生神のことを考えずに生きる人もいる」。神のことは考えずとも、驕り高ぶる「慢」や「上のそら」の漫然さを戒め、今を精一杯に生きて悔いを残さない人もいるだろう。漫然と神のことや宗教のことを考えずに生きるのではなく、意識して神や宗教のことを考えず、たとえば無宗教の人として、日常のかけがえのない価値を実現しようと励む人もいるだろう。この現実の世界には、多様な生き方がある。カトリックの司祭である本田哲郎神父は、次のように述べる。

種蒔きをするはずのわたしたち〔キリスト者〕より、はるかに素晴らしい実を、しかも豊かに実らせている貧しい人々、草の根の運動をする人たち、いくつもの小さな市民グループの存在に気づかされます。その人たちの多くはキリストの教会とは無関係であり、神について考えたこともない人すら少なくありません。それにもかかわらず、なぜか、教会と聖書が期待する確かな実をつけているのです。²¹

神について考えたことのない人のなかにも、あの問いに日々答えつつ生きる人がいる。そのような生活のうちに、教会と聖書の呼びかけと期待にすでに回答している生き方を見て、キリスト者がそこに学び、そこで共に生きる道を探ることはできるだろう。この現実の世界は多元的な価値の並立する世界であり、それらは、対立もするし、ま

た対話し、連帯もしうる。現実世界の多様性のなかで、他者の生活のうちに、みずからが受けている問いへの具体的な応答のあり方を見出すことが、日常生活としての宗教的生活の重要な要素である。愛をもって仕えるという生き方もまた、現実の日常生活のなかで、多様な仕方で応答的に実現される。柳城学院に連なる人たちの外にも、私たちは、本学の建学の精神が具体的で多様な仕方で実現されているのを見出すことができる。この小論が、本学とは直接のつながりのない多くの人たちの言葉に依って建学の精神を聴き取り直そうとするのも、そのためである。本学のうちにも外にも、多様な仕方である呼びかけに回答する生き方を見出し、そこに学ぶことが、私たちにはできる。

3. 4. 仕事と宗教性

すべての人が問われている問い、あなたは日常生活をたいせつに生きているかという問いを、真摯に受け止めれば受け止めるほど、私たちは肯定的に答えられない自分に気づかされるだろう。その事情や理由は、人によってさまざまであろう。ここでは、日々をていねいに生きているかという問いに肯定的に答えられない現代人の事情を3つの面から見ていくことにする。

1つ目は、この問いそのものが聴き取れない現代の日常生活である。日常生活は、職場においても、家庭においても、常に、多忙である。その多忙さが、言い換えると日々の仕事に追われる生活が、そのような毎日の積み重なりとして自分の一生を見つめ直し、自分の一生のなかで今日の生活の意味を見つめ直すようなゆとりを失わせている。保育や教育、福祉の現場においても、日々の仕事は、あの問いのうちで責任応答する日常生活を実現しているとは言い難い。山積していく課題、分刻みのスケジュール、管理された業務、細心の注意を要する対人ケア、日々更新される情報と年々改められる制度、制約された資金や設備環境のなかで、保育や福祉の実践者は、日々の生活をていねいに大切に生きるという生き方でもなく、また、今のこの瞬間に自分が問いかけられ期待されていることへの応答でもなく、ただ目の前の課題や業務に従事するという生き方へと押しや

られているのではないか。総じて、競争社会のなかで生きていくという生き方へと、現代人は、追い込まれているのではないか。よく生きる、という人生の問いは、そうした日々のなかで、規則を遵守し、制度から外れたことをせず、管理下で与えられた課題を的確に処理し、過誤なく効率よく有能性を発揮して生きるという生き方をする事で、何となく解決できていると感じられるようになる。

しかし、そこには、社会全体のあり方を問うマクロな視座も、個々の関係のあり方を問うミクロな視座も失われている。端的に言って、他者への視点が失われている。そこでは、人間は、他者との関係のなかで実現される自己ではなく、他者も自己も制度や規律、業務や組織の秩序のなかでの有用な、あるいは無用な一要素と見なされる。人間が、制度や組織における有能さと業績によって評価される。あの問いは、制度や業務に従事する日常の騒がしさにまぎれて、聞こえなくなる。

ここに、この問いに肯定的な答えを出せない2つ目の要因がある。現代社会は、一人ひとりの人間が、各自の生活においてこの問いに多様な仕方では答えられるような寛容さを失い、画一主義的な社会になっているのではないか。

現代社会は諸個人が有能さや業績によって競争する有能主義あるいは業績主義 (meritocracy) の社会であり、その競争は多元的世界における個々人の多様な価値の実現を促すものではなく、一元的な制度や組織のなかでの「同調的競争」となると述べたのは、教育学者の堀尾輝久である。堀尾によれば、「同調的競争」とは、「一つの価値を軸にランクが細かく刻まれていて、そのなかで競争が行われる」²² ような均質で画一的な価値体系のなかでの競争であり、「競争によって個性化が促されるのではなく、逆に画一的になっていく」²³ ことによって、一つの価値基準の線上に人間が細かくランクづけされていく「画一主義的多様化」²⁴ の原理である。今日では、画一主義的な「多様化」というよりも、画一主義による「格差」という表現がより一般的であろう。現代社会は、支配者・被支配者の固定した血統主義的な階級制度を打ち破り、能力と業績による差異以外の差別を一切なくするような平等主義を実現した欧米の近代化の延長

上にあって、熾烈な同調的競争が国際的規模で広まり、一つの制度的・組織的な価値基準で評価される能力と業績による格差を生み出している。その典型が、経済的な価値基準による競争とその結果である経済格差である。一つの価値を基準にして有能な人間が評価され社会的成功を収める一方で、その価値基準に照らして「君は劣等なんだ」²⁵ という刻印を押され、格差社会の底辺に追いやられる人間がいる。同調的と言い画一主義的と言っても、この競争は、共に生きる社会を実現するのではなく、個々人の孤立化と格差を深めるばかりである。堀尾は、こうした有能主義・業績主義がはらむ画一主義が、人間の多様な価値を実現すべき教育をも蝕んでいると述べる。

こうした価値の画一主義化に対して、すべての人の日常生活がそのうちにあるようなあの問いは、人間を一つの価値基準において評価するのではなく、すべての個々人の生き方の無際限な多様性を引き出し、その個別的な価値の十全な実現を求める。あなたは毎日の日常生活をていねいに生きているかという問いは、各人の多様な生き方、多様な自己実現によって、多様で個別的な仕方では応答される。このことは、私たちの建学の精神において極めて具体的なかたちで表れる。「愛をもって仕えなさい」という言葉は、そのような多様な生活のなかで受け止められ多様な仕方では応答される言葉である。この言葉が、一つの価値基準となり、人間の生き方を評価する尺度となるなら、それは、もはや生きた建学の精神ではなくなる。この言葉は、画一主義的なイデオロギーでも律法主義でもない。

建学の精神は、多様な応答を引き出す。しかし、その多様で個別的な応答は、個々の孤絶した生活において、他者との隔絶のなかで実現されるのではない。多様な生き方を理解し、自己とは異なる価値をそのつど実現しうる他者との関係のなかでこそ実現されうる。つまり、「愛をもって仕えよ」という言葉は、自己の生を問う私的な問いとしてではなく、他者との交わりのなかで受け止められなければならない。他者を、有能あるいは無能な制度上の一機能としてではなく、自己とは異なる生を生きている人、日常生活を生きているひとりの人と理解し、その人と向き合うところ

で、私たちの日常生活が問われている。

この多元的な世界のなかで、自己と同様にあの問いのなかにあるひとりの人として、限界状況のなかにあるかもしれないひとりの人として、他者に関わるとき、日常生活の通奏低音であるあの問いが主旋律となり、最も価値のある、しかし最も困難な問いとして日常生活全体を包みこむ。

この問いに肯定的に答えることの困難さの3つ目の要因が、ここにある。この問いは、私的な問いではない。自己の生のみを問う問いではなく、他者との関わりをなかで問われる問いである。この問いによって私たちは日常生活のなかでの自己実現を問われているのだが、この問いに対して、自己への関心、自己利益（self-interest）の追求によって答えることはできない。言い換えると、私のために私の生があるという生き方によっては、この問いには答えられない。

経済的な価値基準に照らせば無能と見なされるような生活を送る人の生き方のうちに、私たちは、あの問いのうちで自らの日常生活を責任応答的に生きるという困難な生き方が実現されているのを見出すことがある。

三浦綾子は、仰向けに寝たまの13年に及ぶ療養生活の中で、生きる意欲を失い、自分が何のために生きているか分からない虚無的な人間だと感じられるという経験を経て、ギプスベッドに仰臥したまま「人のために心をつかう」ことを始めたことと記している。「人のために祈ることを、自分の仕事とするようになった」²⁶と彼女は言い、「仕事」について、次のように述べている。

仕事という字を見てみよう。仕^{つか}える事^{つか}え
ると、二字とも、まさしくつかえと読む。仕事とは、つまり仕えることなのだ。働くという本来の字も見てみよう。にんべんに動く書く。人のために動くこと、それが働くということなのだ。²⁷

この文章の意図は、字義の解釈にあるのではない。人のために動き、仕えることが、仕事であり働くことだと言っているのである²⁸。仰臥したまま固定された体で生きている生活であっても、人のために動き、仕えることができる。三浦の執筆

活動は、療養生活ののち、突然始まったのではなく、長い療養生活のなかで、友人たち一人ひとりを覚えて祈り、「ギプスに仰臥したまま、たどたとハガキを書いて友人たちに送った」²⁹ときから始まった。それは、彼女の「仕事」だった。「生きていて死んでいる状態の人間がいる。それは、人のためには決して動かない人間だと思う。つまり、働くことのない人間の心は死んでいる、と私は思う」³⁰と彼女は言う。そこで問われているのは、組織や制度のなかでの有能さや業績ではない。今、ここでの自己が、その限界状況のなかで、それでも人のために働き、仕えることができるかということである。他者のために働き、他者に仕えることが、あの問いへの答えとなる。

星野富弘は、口で筆をくわえて詩画を描き、花の詩人と呼ばれている。中学校の体育教師だった星野は、クラブ活動中の模範演技で空中回転したときに誤って頭部から転落し、頸椎骨折、頸髄損傷のため、肩から下の全身機能が麻痺するという重度のしょうがいを負った。回復の見込みはなく、呼吸困難、発熱を繰り返す入院中の病床で、書見器に載せて母親にページをめくってもらう本や、友人や生徒からの手紙を読む日々が続いた。三浦綾子の『光あるうちに』や『塩狩峠』も熱心に読んでいた。そうした日々のなかで、別の病院に転院した元同室の中学生のために、白い帽子に寄せ書きをすることになった。

高久君は、命にかかわるほどの重い病気だった。看護婦さんや部屋の人たちが、それぞれ思い思いの言葉を書いた帽子が最後に回ってきた。くやしいけれど私には、どうにもならなかった。ああ、書ける手がほしい!! どこか動かせるところがほしい!! 彼とは仲のよかった私が直接書いた文字が帽子のどこかにあるのを発見したら、高久君はどんなにか、よろこんでくれるだろう。病床にある者同士の、ささやかな励ましあいである。³¹

星野は、ペンを口でくわえ、初めて首を持ち上げて、ゴマ粒のような黒い点をようやく書いた。しかし、四肢の麻痺した状態で「首を動かすなどあまりに暴挙だった」³²。花の詩人と呼ばれること

になる人の最初の「仕事」は、この全力を尽くした「ささやかな励ましあい」だった。闘病生活を送る年下の友人が、自分の直接書いた言葉を見たら「どんなにか、よろこんでくれるだろう」という思いがそこにあった。彼は、手紙を送り続けてくれる生徒や友人たちにお礼の返事を書きたいと、再びペンをくわえ、スケッチブックを母親に持たせた。一本の線も書けないまま月日が過ぎた。

でも私はあきらめなくなかった。口で字を書くことをあきらめるのは唯一つの望みをすてることであり、生きることをあきらめることでもあるような気がしたからである。

「からだの中で比較的弱いとみられる器官が、かえってなくてはならないものなのです」(コリント人(1)の12章22節)

読み進んでいた聖書の中で見つけた言葉だ。

聖書のいうように本当に神様がいますとすれば、神様は私のような者でも認めてくれているのである。そしてこんな者にも役割を与えて何かをさせようとしている。

いまの私の役割は、口で字を書くことなのかもしれない。神様が本当にいて欲しいと思った。³³

花の詩人、星野富弘の「仕事」は、こうして始まった。そこには、彼を励ます生徒や友人たち、同部屋の人たち、看護助手や実習にきた看護学生、姉や弟、そして付ききりで看病する母親がいた。その人たちのために、星野は書き始めた。その「暴挙」をあきらめることは、「生きることをあきらめること」のように感じられたのである。星野は、彼を励まし、支え続ける人たちのために、実行不可能に思える「仕事」を始めた。星野は、病室で洗礼を受けたあと、母親について語っている。

私が入院する前の母は、〔中略〕私にとってあまり魅力のない母だった。私がけがをしたとき、話をきいただけで貧血をおこし、気管切開の手術あとをみてへなへなと坐りこむ母だった。母が世間一般にいう強い人なら、私をおい

て家へ帰り、私のために自分のすべてを犠牲にするようなことはしないで、もっと別な方法を考えたかもしれない。しかし母には私をおきざりにできない弱さがあった。そのどうにもならない弱さが、いまの母を支えるもっとも強い力なのではないだろうか。

もし私がけがをしなければ、この愛に満ちた母に気づくことなく、私は母をうす汚れたひとりの百姓の女としてしかみられないままに、一生を高慢な気持ちで過ごしてしまう、不幸な人間になっていたかもしれない。³⁴

そうした人たちのために、また、そうした人たちに支えられて、星野は書き始めた。それは、実行不可能に思える「暴挙」である。そこには、「神様が本当にいて欲しい」という思いがあった。そして、人のために動くという懸命の働きがあった。

日常生活をていねいに生きているかという問いは、その生活を支え助けてくれる他者へのまなざしが開かれ、また、他者のために仕えるという働きが起されるところで、はじめて受け止められる。そのような他者のために働こうとするとき、その実行不可能に思える困難のさなかで、神が共にいてほしいという切実な呼びかけがある。福音書では、このような他者を「隣人」と呼んでいる。

現実の世界では実質的に実行不可能な生き方であっても、人間が生きていく上で、特に人間が困難や困窮、苦悩や悲嘆、差別や暴力、強制や抑圧のなかでそれでも生きていくために、実践的に取り組まなければならない営みがある。フランクや賢治、三浦や星野は、その営みの力となるものを、現実の社会を超えた次元のうちに求めてきた。言い換えると、隣人を前にして、現実の社会ではいまだに実行不可能ではあってもなお、その営みを実践において実現しなければならないという危急に際して、人は、その実践の力の源となるものを、現実世界の奥底を突き抜けた深い次元に求めてきた。隣人のために働こうとするとき、今、神が共にいてほしいという切実な希求がある。その希求のさなかに向けて、聖書の言葉が与えられている。超越的な次元から、呼びかけ促し働きかけるものがあって、それに依ってこそ、

個々の生を生きる人間がその個性と孤独を破って隣人へと関わり、隣人のために働くという実行不可能な営みがはじめて実践される。実行不可能なことが実行されるという意味で、それは、逆説的な営みである。しかし、そのような逆説を具体的に実現した実践を通じて、危機や限界状況のさなかを生きて、あの問いに答え続けた人がいる。さらに付言すれば、それは、特別な歴史的偉業ではなく、人が生きる現実の世界のそのつどの「今、ここ」で、隣人との交わりのなかで、ていねいに、ことさら表立つことなく行われている。

「人間には希望がないといけない。私という存在が他者に希望を与えることができることが大切である」³⁵と聖路加国際病院の日野原重明は柳城学院創立100周年記念講演で語っている。私という存在が他者に希望を与えることができるということが、隣人に交わる生活の意味であり希望である。隣人のために働き、私という存在が隣人に希望を与えることができると知るとき、自分の生活に価値、意味、希望が見出される。共に生きるという生活の意味と希望がそこにある。本学の学院生活のなかで建学の精神からまず聴き取りたいのは、このこと、つまり他者に希望を与える自分の働きの大切さを知ることである。保育者、教育者、介護福祉士などを志して学院生活を営む学生たちは、学院生活のなかで、隣人に仕える働きの意味を建学の精神のうちに聴き取ることができるだろう。日野原の講演録には、次のような言葉がある。「自分の存在に意味があると思うとき、その意味のために生きがいを感じるようになる。介護士や幼児教育の場合も、何らかの生きがいをもつことで、つらいことにも耐えることができる。21世紀を自分が支えていくという、自分の仕事の意味を感じることが大切である。」³⁶幼児教育、保育、介護に携わる人の「仕事の意味」は、自分の存在が、この世界のなかで小さくされた者たちのために働き仕えることによって、その者たちに希望をもたらすのを知ることである。隣人に関わるという困難な働きのなかで、その困難に耐え、自分の働きが隣人に希望を与え、自分の生活に意味を与えるのを知ることが「仕事の意味」である。建学の精神は、そうした生活を私たちに問い、また私たちにその意味と希望を知らせる。そこに語

られているのが、「愛」である。創立100周年を迎えたとき、当時の学長田浦武雄は「キリストによって示された愛の精神によって、実りある創造の仕事に励むことが大切である」³⁷と語っている。

愛によって互いに仕えることが、共に生きる生活の希望であり意味であるということ、そして、そこに困難を耐え、「実りある創造の仕事」がなされうるということが、建学の精神のもとに営まれる学院生活の意味であるといえる。

4 愛による共同体

4. 1. 自己を犠牲にする愛

日野原は上述の講演のなかでフランクフルトに言及して、「愛すること愛される存在であるという自覚」が起きるとき、それは日常生活の困難や逆境に「耐える力」、「創造する力」となると述べている³⁸。そのとき、力とは、画一主義的な価値基準に支配された同調的競争のなかで勝ちあがる力、他者を圧する競争力ではない。隣人のために仕える生活のうちで働く力、弱さのなかに働く力である。「すると主は『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。」(二コリント12：9)

星野富弘が母について語った言葉を振り返ってみよう。そこには「この愛に満ちた母」という言葉がある。その母が、「世間一般にいう強い人」であれば、回復の見込みのない四肢麻痺の息子を病院や施設に預けて、自分の生活に向かったかもしれないと星野は言う。しかし、彼の母にはそれができなかった。母は、自分の生活のすべてを犠牲にして、息子に付き添った。星野は、彼を置き去りにできない母の「どうにもならない弱さ」が、「今の母を支えるもっとも強い力」だろうと言い、その弱さのうちにある母を「この愛に満ちた母」と呼ぶ。理屈や利害を超えたものが、そこにある。

自分のすべてを犠牲にして人のために仕えることは、星野の言うように、世間一般にいう強さではない。それは、弱さだと星野は言う。そして、回復の見込みのない息子を置き去りにできないその弱さこそ、「もっとも強い力」だと言う。限界状況にある隣人を置き去りにできず、みずから最も困難な状況のうちに留まる弱さこそ、その人を支

える最も強い力なのだ。隣人を前にして自己の生を貫けず、隣人のもとに留まり、その人のために自己のすべてを犠牲にするような弱さのうちで、あの問いに応答する生き方が実現されている。そのとき、その人の今日の一日は、この隣人のために、なくてはならないものである。その人の毎日は、その隣人のために、どうしてもなくてはならない日々である。隣人を置き去りにできない弱さ、自己のすべてを犠牲にして隣人のもとに留まる愚かさ、そのまま、あの問いのさなかで生きる者を支える最も強い力となる。愛とは、そのようなものである。愛においては、隣人を前にした弱さが自他を支える最も強い力になるという逆説がある。人のために自己を犠牲にして仕える弱さが、あの困難な問いにまっすぐに答える最も強い力に転換することが、「愛における逆説」である。

日常生活をていねいに生きよという言葉は、隣人を前にしたこの弱さのなかで受け止められ、隣人のために自己のすべてを犠牲する弱さのなかで応答される。その応答は、「愛をもって仕えよ」という言葉への生きた一つの応答となる。

4. 2. 共に生きる生活へ

日常生活をていねいに生きているかという問いへの応答は、「愛をもって仕えよ」という言葉への応答となる。建学の精神は、このようにして、日常生活を問うあの問いをくっきりとしたかたちで言葉にし、私たちに期待し呼びかける。日常生活を自分のためにではなく隣人のために生き、隣人のために働くことによって、あの問いに応えることができる。しかし、ここで、私たちが直面する困難は、さらに深刻なものになる。いったい、人のために生きる、隣人のために働くとは、どのようなことなのか。そして、それは、可能なのか。

先ほど言及した本田神父は、大阪の釜ヶ崎で日雇い労働者たちと関わるなかで、次のような問いを発する。「一生懸命に相手のことを思っている、そのことがしばしば相手を傷つけてしまうという経験が皆さんにもあると思います。それはなぜか。」³⁹「隣人のために、特に、社会的・身体的・精神的な様々の弱さや痛みの中にある「小さくされた者」のために仕え、働いているつもりが、返ってその人を傷つけ、「弱い立場をさらに弱くし」⁴⁰

てしまうことが、しばしばある。それは、なぜか。本田は、端的に、次のように言う。

相手に対して、自分で立つ力がないものと決めてかかり、「ために」というかわりに終始してしまうからでしょう。弱い立場に立たされている人の力強さに気づいて「ともに」というところまで踏み込むことが大切です。⁴¹

この言葉には、釜ヶ崎で働く本田の経験が凝縮されている。人の「ために」という関わり方に留まっていると、そこには、強い立場から弱い立場へ、与える立場から与えられる立場へ、という構図ができてしまう。そうした構図が、「弱い立場をさらに弱くし」ていく。自らを犠牲にしつつ隣人を生かそうとする働きを愛と呼ぶなら、そこには、この構図を破って、強い立場、与える立場を放棄し、弱さのなかへ、低みへとみずから降りていくことが必要である。それは、隣人の弱さをみずからの弱さとして感じる、隣人の痛みをみずからの痛みとして感じることである。「私は今、釜ヶ崎で一つだけ大事にしようと気をつけていることがあります」と本田はていねいにみずからを省みて語る。「それは、労働者とかかわりににおいて、痛みをどこまで共感できるか、どこまで理解できるかということです。痛みがまだよく分からない場合には、『教えてください』という姿勢でかわるしかありません。」「⁴²相手の立場に身をおき、相手の立場で世界を見、痛みを感じて、相手の立場に立って理解するということの大切さについて、私たちは日頃から口にもし、行おうとしている。しかし、自分の人生を生きているのは自分しかいない。自分の痛みを感じるのは自分しかいない。自分が関わろうとしている相手の感じる痛みや苦しさを自分が感じることはできない。相手に代わってその人生を生きていることはできない。相手と同じ立場に立って同じ痛みを感じることはできない。

では、人を理解するためにはどうしたらよいのでしょうか。実は「理解する」に当たる英語の表現が示唆に富んだ言いまわしになっています。under-standing「下に立つ」ということで

す。実にこの姿勢こそ、お互いを理解することの基本となるものです。相手と同じ立場に立つとするのではなく、相手よりも下に立つ(stand under others)。つまり、「教えてください」という姿勢でかかわるということです。⁴³

私たちは、建学の精神に立ち返るとき、このような言葉にも真摯に耳を傾け、その姿勢に学ぶ必要がある。人に仕えるということは、「下に立つ」こと、みずから身を低くして仕えることであり、それが、共に生きるということの原点である。

「下に立つ」とは、この現実世界のなかで小さくされ制約された者の立場へ、限界状況へと立つことだけではない。そこから、その隣人の痛み苦しみを「教えてください」という姿勢まで身を低くすることだと本田は言う。そして、そのときはじめて、共に生きる生活が開かれるのだ、と。すなわちそれは、上からの立場、制度的・組織的な社会秩序の立場、福音書で言われている律法に固執する立場から、「下に立つ」ということへ、下から「教えてください」と見上げる立場へと身を置くことによって、人のために仕えるという仕事を、愛をもって隣人と共に生きる共同の生活へと深めていくということであろう。

一言で言えば、人の「ために」仕えるということは、人の「下に立つ」ということである。それは、隣人の日常生活あるいは限界状況における困難を、その人の下に立ってみずから引き受けようとする営みである。本田も認めるように、それは、矛盾した命題であり、社会的な関係を考慮すれば極めて実行困難であり、また自己と他者の生の個性という存在論的な観点からいえば、厳密な意味で私たちには実行不可能である。

この競争社会、格差社会という現実の世界のなかで、私たちにまず見えてくるのは、競争に勝つ者たちの能力と業績であり、私たちはそれを評価し賞賛し、その能力と業績に信頼を寄せ、その高みへとみずからも隣人も高めようと努力する。現代社会に決定的に欠落しているのは、競争のなかで弱い立場、低い立場へと追いやられていく小さい者へのまなざしである。「愛をもって仕えよ」という言葉を福音書が描くイエスの言動に照らしたとき、それは、社会の底辺へ追いやられ、日常を

ていねいに生きることを奪われた者の下に身を低くして立つという生き方へと呼びかけている。

2つのことを、本田の実践と言葉から学びたい。

まず、律法の奴隷という立場から、愛によって隣人の奴隷となる立場へと解放される、という逆説的な出来事がそこにあるということである。

本学ではすでにこのことが保育者と子どもとの関わりにおいて深く考察されている。本学の元教授岩井勇児は「建学の精神を保育者に当てはめると、『よい保育者』の奴隷から解放されて自由になること、この自由を維持するためには、子どもの奴隷となることによって自由を得ること」⁴⁴と述べている。岩井は、「保育者をめざして入学してきた真面目な学生たちは、よい保育者、立派な保育者をめざしている」が、その学生たちには、「よい保育者」像を自分で描けず、そのため自己評価できずに他者の評価に頼る傾向があると指摘し、次のように述べる。

そうなると、「よい保育者」をめざすことは、絶えず他者の目を気にすることにつながり、他者からよく見られることに心が奪われて、心身共に固くなり、肝心の子どもの心が見えなくなる。

子どもを育てるために「よい保育者」をめざすことが、かえって子どもを育てない、という皮肉な結果になる。これを聖書的に言えば、自分の力だけで「よい保育者」をめざすと、いつの間にか、「よい保育者」が律法となって、保育者が律法の奴隷になってしまうのである。

イエス・キリストは、「よい保育者」の奴隷となっている保育者を解放して、自由を与えてくださる。すなわち、保育者として、成果があげられなくても、失敗しても、よい評価が得られなくても、どじでもよい、保育者のありのままの存在を認め、保育者を見捨てないで「私がすべてを分かっているから、他者の目を気にしなくてもいいよ、自分の力でできること[を]やればいいよ」と支えてくださるのだ。⁴⁵

コルチャックが、子どもを前にして「ありのままの自分でいなさい」と言い、「子どもたちが自分

自身であると思われるときに、子どもたちを熟視するのです」と言ったことを想起したい。律法の奴隷から解放されて、ありのままの自分として子どもの前に立ち、自分の力でできることをていねいに精一杯やる。保育の日々をていねいに、ありのままの自分として生きるということは、業績主義・成果主義からの解放であり、「よい保育者」という律法からの解放であり、眼前の子どものありのままの今に、自分自身のありのままの今が交わることである。そこに働くのが、保育者のありのままの存在を認め、保育者を見捨てないイエス・キリストの支えだと岩井は言う。この支えこそ、学院生活を通じて私たちが気づく日常生活と仕事の不動点なのだ。保育者は「愛すること愛される存在であるという自覚」のなかで、律法主義から解放されてありのままの存在として、ありのままの子どもと交わる。そのときこそ「私という存在が他者に希望を与えることができる」という共に生きる生活が、日々、実現されるだろう。

互いにありのままで共に生きる生活は、律法主義から解放されて、愛をもって「仕える」ということ、「下に立つ」ということによって、日々、実現される。岩井は次のように述べている。

聖書は、この得られた自由を維持するためには、保育者は、愛をもって、子どもの奴隷となきなさい、と言っている。すなわち、保育者は、子どものために自分は不自由になきなさい、そうすれば保育者として自由が得られる、と言っているのだ。

子どもの奴隷となることは、子どもの言いなりになることではない。保育者が、自分を捨てて、子どもが育つことに、すべてをかけることである。⁴⁶

愛をもって子どもの奴隷となり、子どもが育つことにすべてをかける。そうすれば、保育者として自由が得られる。そこで求められるのは「よい保育者」としての成果や評価ではなく、ありのままの存在として保育者が、毎日の保育者生活をていねいに、子どもが育つためにすべてをかけて、生きているか、という問いに責任をもって応答することである。岩井は、「子どもの心を見抜いて、

子どもが育つために今何が必要か、保育者として判断し、保育者自身の責任と能力で、子どもに必要なことを実行することである」⁴⁷と述べている。そこに、毎日の保育者生活の責任と困難がある。そして、そこに、「私という存在が他者に希望を与えることができる」という喜びがある。そのとき、「仕える」という姿勢で身を低くしてはいたはずの保育者は、ありのままの自分として立ち、子どもを正面から受け止め、ていねいに精一杯、責任応答していく。そこに岩井は「愛による逆説」⁴⁸を見出している。

本田から学びたい2つ目の事柄は、子どもの心を見抜くということ、隣人を理解することである。小さくされた隣人を理解しようとするときこそ、「下に立」ったところから共感し、「教えてください」という姿勢が必要であると本田神父は言う。このことと、コルチャックの次の言葉とを照らし合わせてみたい。

大人の読者に

大人たちは よくこう言います。
「子供(ママ)の相手はほんとうに疲れるよ」

そのとおり そのとおりです
また
「何でも 子供に
合わせなくてはならないからね
背中をちぢめ 腰をかがめ
体を曲げて 小さく小さくしなくてはならないから」

そう思うのは間違いです
いちばん疲れるのは
そうなのではありません
むしろ
子供たちの感性の高みまで
感情を高めていかなければならないからなので
す
ひろく 長く
背伸びするように
心を 感情を伸ばすからなのです

子供の優しい心を傷つけまいと⁴⁹

共に生きるということは、小さくされた者たちの低みへと身をかがめるだけではない。この社会のなかで小さくされた隣人の感性の高みまで、私たちはみずからを高めなければならない。愛をもって子どもに仕える、子どもの奴隷となるということが保育者の真の自由となるのは、大人が体をちぢめ子どもの低みまで身をかがめることによってではない。大人が子どもの感性の高みまでみずからを高めていくということのうちに、共感があり、配慮があり、創造へと開かれた自由がある。

そこに、互いに生かし生かされながら共に生きる生活がある。その生活の希望を告げ知らせ、その生活の困難に寄り添い、その生活を支えてくれるのは、隣人を前にした弱さのなかに働く力、すなわち愛である。建学の精神「愛によって仕えなさい」という言葉は、多様な学院生活のなかで、多様な仕方で受け止められ、多様な仕方で応答される。その多様な受け止めと多様な応答が、ていねいに精一杯生きる日常生活そのものをもってなされ、そして、多様な生活がその多様性を実現しつつ隣人との交わりへと開かれて、個々の生活が共に生きる共同の生活となるところにこそ、この言葉が不動点としてあるということを、私たちは日々覚えておくことが大切である。共同の生活としての学院生活は、建学の精神に責任応答しようとするなかで、多様性を尊重しつつ、一人ひとりがありのままの自分であることのできる共同の生活へ、そして一人ひとりがその漫然と送り迎えていた毎日の貴重さに気づき、その気づきのなかで建学の精神へと立ち返ってみずからの生活を顧み、今を創造的に生きる生活へと変容するだろう。それは、今日も継続する建学の営みそのものである。この営みを通じて、愛による逆説によって互いに仕え、互いを認め合い生かし合う共同の生活が、すなわち愛による共同体がつくられる。

5 終わりに

本稿では、学院創立110周年を迎えて、改めて本学の建学の精神に立ち返った。ここでは、聖書の使信として「愛をもって仕えよ」という言葉を受

け取り、日々の学院生活を含めた日常生活のなかで私たちがこの言葉のうちにあって常に問われ、また学院生活において出される問いに対してこの言葉が絶えず応答していることを示した。

私たちは、多様な学院生活の不動の中心点として聖書の使信を見出し、問いかけと応答との対話的な生活のなかで、日々、愛によって結ばれた共同体に与っている。それは、今日に至る建学の営みに参与することである。

注

- 1 以下の釈義においては、荒井献他『総説 新約聖書』日本基督教団出版局、1981年、241-253ページ、P. アルトハウス他『NTD 新約聖書註解 パウロ小書簡』ATD・NTD 聖書註解刊行会、1979年、1-144ページ、C.B. カウザー『現代聖書注解 ガラテヤの信徒への手紙』日本基督教団出版局、1987年、ドナルド・ガスリ『ニューセンチュリー聖書注解 ガラテヤの信徒への手紙』日本キリスト教団出版局、2004年、を参照した。
- 2 建学の精神の文言が現在の形で用いられ始めた時期を正確に特定することはできないが、種々の資料から、本学の創立者マーガレット・ヤングに帰される言葉であることは確かである。ただし、後述するように、日本語の文言は新約聖書の大正訳が元になっていることから、これについては大正訳聖書が刊行された1917（大正6）年以降に成文化されたものと考えられる。
- 3 「one another」が削除された経緯は不明である。近年、この部分の意味における重要性が本学において論議され（例えば、岩井勇児「建学の精神『愛をもって仕えよ』」に関する学生の意識、『名古屋柳城短期大学紀要』第24号、2002年）、2005年から2006年にかけては対外的に「愛をもって互いに仕えよ」の形で使用していたことがあった（英文については修正せず）。しかし、理事会はこれに賛同せず、文言はそのまま保存しつつ、解釈においてこのニュアンスを含めることとされた。本小論を物した一つの意図はこの点にもある。
- 4 石原吉郎「ある〈共生〉の経験から」、『望郷

- と海』ちくま学芸文庫、筑摩書房、1997年(『思想の科学』1969年3月号初掲)、24ページ。
- 5 V. E. フランクル『それでも人生にイエスと言う』山田邦男・松田美佳訳、春秋社、1993年。
 - 6 清水昶『詩人 石原吉郎』海風社、1987年、95ページ。なお、川本隆史は、この言葉が、石原のエッセイに衝撃を受けた学生の「じゃあ、どう生きればいいのか」という質問への答えではないかと推測する(野家啓一他編『新哲学講義6 共に生きる』岩波書店、1998年、20ページ)。
 - 7 フランクル、上掲書、26-30ページ。V. E. フランクル『夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録』新版、霜山徳爾訳、みすず書房、1971年、183-184ページ。
 - 8 ボンヘッフラー『現代キリスト教倫理』森野善右衛門訳、新教出版社、1978年、299ページ。
 - 9 ヤヌス・コルチャック『子どもをいかに愛するか』第1巻「家庭の子ども編」第40章、1920年初版、1929年補充版(塚本智宏『コルチャック 子どもの権利の尊重』子どもの未来社、2004年、122ページ)。
 - 10 ヤヌス・コルチャック『子どもの権利の尊重』1929年(塚本智宏「資料紹介:コルチャック著『子どもの権利の尊重』」、『季刊教育法』92号、1995年、104-5ページ、塚本智宏『コルチャック 子どもの権利の尊重』子どもの未来社、2004年、78ページ、123-124ページ)。
 - 11 ヤヌス・コルチャック『理論と実践』1925年(塚本智宏『コルチャック 子どもの権利の尊重』子どもの未来社、2004年、122ページ)。
 - 12 ヤヌス・コルチャック『子どもをいかに愛するか』第1巻「家庭の子ども編」第37章「補充」、1920年初版、1929年補充版(塚本智宏『コルチャック 子どもの権利の尊重』子どもの未来社、2004年、141ページ)。
 - 13 ヤヌス・コルチャック『子どもをいかに愛するか』第2巻「寄宿学校編」第8章、1920年初版、1929年補充版(塚本智宏『コルチャック 子どもの権利の尊重』子どもの未来社、2004年、125ページ、152ページ。ヤヌス・コルチャック著・サンドラ・ジョウゼフ編著『コルチャック先生のいのちの言葉』津崎哲雄訳、明石書店、2001年、22ページ。本論の訳文は津崎訳により、欠落部分を塚本訳で補った。)
 - 14 ヤヌス・コルチャック著・サンドラ・ジョウゼフ編著『コルチャック先生のいのちの言葉』津崎哲雄訳、明石書店、2001年、103ページ。
 - 15 宮澤賢治「農民芸術概論綱要」序論、『新校本 宮澤賢治全集』第13巻(上)、筑摩書房、1997年、9ページ。
 - 16 『新校本 宮澤賢治全集』第15巻、筑摩書房、1995年、459ページ。
 - 17 三浦綾子『光あるうちに』道ありき第三部信仰入門編、新潮文庫、新潮社、1982年(主婦の友社、1971年)、18ページ。
 - 18 三浦、同書、21-22ページ。
 - 19 三浦、同書、22ページ。
 - 20 マルティン・ブーバー『我と汝・対話』田口義弘訳、みすず書房、1987年、14ページ。ブーバーは次のようにも述べている。「言葉が人間のなかにやどっているのではなく、人間が言葉のなかに立って、言葉のなかから語るのである。」(同書、53ページ)。
 - 21 本田哲郎『続 小さくされた者の側に立つ神』新世社、1992年、31ページ。〔 〕は引用者。
 - 22 堀尾輝久『日本の教育』東京大学出版会、1994年、309ページ。
 - 23 堀尾、同書、309ページ。
 - 24 堀尾、同書、324ページ。
 - 25 堀尾、同書、304-305ページ
 - 26 三浦、上掲書、13ページ。
 - 27 三浦、同書、11ページ。
 - 28 本論文は、三浦にしたがって、「仕事」と「働き」を概念的に区別しない。田浦武雄は、カール・バルトによる「働く生活と仕事の生活の概念的な区別」を職業倫理と人間形成の問題において考察し、召命と職業労働の関連を論究してバルトの人間形成論の意義と課題を明らかにしている(田浦武雄「信仰と教育—カール・バルトの思想を中心に—」、『名古屋柳城短期大学紀要』第20号、1998年、23-34ページ)。田浦は、ルターの召命と職業労働の同一視に対するバルトの批判を、「職

業がキリスト教的に偽装されるおそれがある。また無職業のものは無召命ということになるのではなく、召しは職業以上の概念である。召命は一定のところにとどまるのではなく、人間存在に関する必然的な自覚の方向づけと考えられるべきである」(田浦、同書、29ページ)と要約している。本論文は、この論考を踏まえ、三浦の語彙を用いつつ、日常生活における「仕事」や「働き」を「人間存在に関する必然的な自覚の方向づけ」のうちにあるものとして考察する。

29 三浦、上掲書、13ページ。
30 三浦、同書、11ページ。
31 星野富弘『愛、深き淵より』立風書房、1981年、99ページ。
32 星野、同書、100ページ。
33 星野、同書、101-102ページ。
34 星野、同書、135ページ。
35 日野原重明「新しい世紀へ創造と愛を」創立100周年記念講演、『名古屋柳城短期大学研究

紀要』第20号、1998年、9ページ。
36 日野原、同書、10ページ。
37 田浦武雄「創立100周年記念号にあたって」、『名古屋柳城短期大学紀要』第20号、1998年、1ページ。
38 日野原、上掲書、10ページ。〔 〕は引用者。
39 本田、上掲書、8ページ。
40 本田、同書、8ページ。
41 本田、同書、8ページ。
42 本田、同書、19ページ。
43 本田、同書、20ページ。
44 岩井、上掲書、209ページ。
45 岩井、同書、208ページ。〔 〕は引用者。
46 岩井、同書、209ページ。
47 岩井、同書、209ページ。
48 岩井、同書、209ページ。
49 ヤマシユ・コルチャック『もう一度子供になれたら』近藤康子訳、図書出版社、1993年、序言「読者に」(ページ数表記なし)。

On the School Motto of St. Mary's College, Nagoya

Murata, Yasuto*
Ichihara, Shintaro David*

本稿は、創設110周年を迎えた柳城学院の建学の精神を改めて問い直す試論である。ここでは、学院生活の意味の中心としての建学の精神を、「ゆらぎや多様性における不動点」として理解することを試みた。多様な学院生活が、その多様性を十全に実現しながら一つの共同の生活となる建学の継続的な営みのうちに、不動点としての建学の精神を見出すということが、本稿の基本的な立場である。

ここでは、聖書の使信として「愛をもって仕えよ」という言葉を受け取り、日々の学院生活を含めた日常生活のなかで私たちがこの言葉のうちにあって常に問われ、また学院生活において出される問いに対してこの言葉が絶えず応答していることを示した。

私たちは、多様な学院生活の不動の中心点として聖書の使信を見出し、問いかけと応答との対話的な生活のなかで、日々、愛によって結ばれた共同体に与っている。それは、今日に至る建学の営みに参与することである。

キーワード：建学の精神，聖書，ガラテヤの信徒への手紙，愛，多様性